The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	南方熊楠の思想形成における『東洋学芸雑誌』と『ザ・ポピュラー・サイエンス・マンスリー』
Author(s)	サライ，ペーテル
Citation	日本語・日本文化. 2015, 42, p. 137-156
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/56919
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

〈研究ノート〉

南方熊楠の思想形成における『東洋学芸雑誌』と『ザ・ポピュラー・サイエンス・マンスリー』

サライ・ペーテル

はじめに

「貴下は生きたるインサイコルヘジヤなるべし。何にても御了知のこと多し」[1]、後に真言宗各派連合総裁などを歴任した学僧、土宜法竜（1855～1923）は南方熊楠（1867～1941）に1893の冬、こう書き送った。南方の没後においても、「日本における最初で、最後のエンサイクロペディスト」[2]であったと評価されるなど、南方の名前は生前から「博覧強記」と結びついていた。それは、南方が観察と実験の重要性を訴える一方、それほど深くなくてもできるかぎり広い範囲の知識を求め、活用したからである。その根底には『和漢三才図会』や *Encyclopædia Britannica* などの百科事典の類があった。

それだけではない。南方は十代からいわゆる総合科学雑誌の類も熱心に読んでいた。南方は1889年頃から *Nature* 誌を読んでいたことが知られているが、本稿では彼がそれ以前からこの類の雑誌を好んで読んでいたことに注目する。すなわち、南方が1884年～1887年、東京大学予備門に通っていたころ読んでいた『東洋学芸雑誌』と1887年～1990年、アメリカ滞在中に読んでいた *The Popular Science Monthly* の二つを紹介する。南方がこの時期に読んでいた数ある雑誌からなぜこの二つを取り上げたかというと、それぞれ南方の人生で一つの時代を代表する情報源と言えるからである。更に、二つとも彼の思想的遍歴において重大な役割を果たしたからである。

本稿は、現在執筆中の博士論文の主題である南方と英国哲学者H. スペンサー（Herbert Spencer, 1820~1903）ならびに進化思想を扱う過程で極めて重要な前提条

件を知る企てである。すなわち、若き南方が研鑽を開始する東京での予備門時代、ならびに米国滞在期間の思想形成を知る上で必須の作業である。

ではまず『東洋学術雑誌』から見てみよう。

『東洋学芸雑誌』

南方は幼いころから勉強好きであった。和歌山中学卒業後、当時日本で唯一の大学であった東京大学を目指して1883年に上京した。そして1884年にその予備機関である東京大学予備門に入学した。ところが、1886年の初めには予備門の厳しさに耐えられず中退し、同年末には父親を説得して渡米し、東京大学への進学の夢は果たせずじまいになった。南方はこの時期について後に次のように語った。

> 明治十六年に中学を卒業せしが学校卒業の最後にて、それより東京に出で、明治十七年に大学予備門（第一高中）に入りしも授業などを心にとめず、ひたすら上野図書館に通い、思うままに和漢洋の書を読みたり。したがって欠席多くて学校の成績よろしからず[3]

ここでは南方が授業に対して示した無関心が強調されている。しかし、南方は予備門に通っている間、『中央学術雑誌』[4]、『学芸志林』[5]、『東洋学芸雑誌』という、東京大学関連の三誌を欠かさず購入し続けていた。この事実は実際に南方がどれほど東京大学を意識していたかを物語っている。本稿でとりわけ注目したいのは『東洋学芸雑誌』である。

まず、南方の日記[6]に見られる『東洋学芸雑誌』に関する記述を見てみよう。

1885年：

1月26日　「九銭にて東洋学芸雑誌、二十八銭にてジ・ライフ・オフ・クライブを買ふ。」(9頁)

2月26日　「九銭にて東洋学芸雑誌第四十一号を買ふ。」(13頁)

3月26日　「東洋学芸雑誌第四十二号を買収す。」(18頁)

3月27日　「午後有地氏を訪ふ。六時帰宅。同氏より東洋学芸雑誌第十六号もらふ。」(18頁)

4月　2日　「東洋学芸雑誌第四十二号買ひ国元へおくる。」（19頁）
4月25日　「東洋学芸雑誌第四十三号かふ。」（23頁）
5月13日　「東洋学芸雑誌三十一より四十迄装釘して一冊となす。」（27頁）
5月15日　「東洋学芸雑誌四十三号をかひ国元へおくる。」（27頁）
5月25日　「中央学術雑誌第六号、東洋学芸雑誌第四十四号を購ひ国へおくる。」（28頁）
6月27日　「東洋学芸雑誌第四十五号を購ふ。明日国元へおくる。」（32頁）
7月25日　「夜里見八犬伝巻之九、東洋学芸雑誌第四十六号を購ふ。」（35頁）
7月26日　「中央学術雑誌第十号を購、明朝東洋学芸雑誌と共に国へおくる。」（35頁）
8月25日　「東洋学芸雑誌第四十七号買。」（38頁）
9月25日　「東洋学芸雑誌第廿五号かい国元へおくる。」（42頁）
10月17日　「東洋学芸雑誌自第十一至第二十号合本一冊成、今夜受取。」（45頁）
11月25日　「東洋学芸雑誌第五拾号を買ふ。」（49頁）
12月25日　「東洋学芸雑誌五十一号及八犬伝十九冊購。」（52頁）

1886年：

1月25日　「東洋学芸雑誌第五拾弐号を購ふ。」（59頁）
4月　5日　「池田氏に託せる東洋学芸雑誌第五十四号及安政三組盃第十編、八犬伝二十七、三十二、本日郵着。」（67頁）
5月　9日　「池田元太郎氏より先月十六日贈れる録にて購収せる八犬伝卅三、卅四、新磨妹と背鏡三、四、二冊、安政三組盃十一、東洋学芸雑誌第五十五号を贈らる。」（72頁）
6月　1日　「池田元太郎氏より東洋学芸雑誌第五十六号到着す。」（75頁）
7月　3日　「池田氏より東洋学芸雑誌着。」（79頁）
7月31日　「東京池田氏より東洋学芸雑誌第五十八号到着す。」（83頁）
9月17日　「本日常楠より東京学芸雑誌五十九号、未来の夢第八冊を贈らる。」（89頁）

1887年：

3月25日　「常楠より所送写真数枚及東洋学芸雑誌第六十五号を受く。」（114頁）

4月　5日　「領事館にて常楠よりの状一及東洋学芸雑誌一月分及他に状三（羽山・浅井、野尻、中松の四氏より）を得たり。」（116頁）

4月27日　「Presented The Toyō Gakugei Zasshi 2 vol. to Mr. T. Tamura, Napa City.」（117頁）

南方熊楠顕彰館に保管されている『東洋学芸雑誌』は、1881～1886年発行のものは第1～40号、第53～60号、第62号しかない。しかし、上記を見ると、発見されていない41～52号も南方が持っていたことが分かる。南方の日記は1885年以前のものは非常に乏しいので、彼が何時本誌を読み始めたか判断しにくい。しかし、21号～30号を一冊にまとめた南方の本の中では、*"This book belongs to K Minakata June 7th, 1884"* という書き込みが見られる。さらに、それ以前の11号～20号をまとめたものを彼は1885年10月17日に購入したことは上で示した。すなわち、1884年の6月7日に初めて『東洋学芸雑誌』を購入した可能性が極めて高い。

南方の本誌に対する執着度は、次のいくつかの事実が物語っている。①南方は毎月25日の出版日の後間もなく本誌を購入していた。②バックナンバーを揃えた。しかもそれに丁寧に目次と見出しを付け、文書中の誤字を訂正した。すなわちほとんどの記事を精読したと思われる。③予備門を中退し、里帰りした後は、わざわざ東京の友人と弟に頼み、渡米直前の1886年11月の分まで送ってもらっていた。④1887年には南方の弟がアメリカまで最新号の二冊を送った。

南方は本誌を熱心に読んでいたことは以上で明らかになったが、そこから彼は何を学んだかを考えたい。では、次に『東洋学芸雑誌』はどのような雑誌であったかを見てみよう。

『東洋学芸雑誌』は後の予備門の校長、杉浦重剛（1855～1924）が発刊した。杉浦は後に、本誌の第487号では次のように回想している。

> 顧れば今より四十余年前、明治十三年の夏、私が英国留学から帰つて来て、病を箱根に養ふて居た折にも、予て英国に於て愛読措かなかつた通俗科学雑誌『ネチユール』のことは忘れられず、此種の雑誌の、未だ日本に一つも無いのを甚だ遺憾とし、寧ろ自から之が発刊を試みようとさへ思つた位であつた。

偶々私の友人で、又親戚にも当る千頭清臣君が東京大学文学部を卒業したといふので、手紙を寄越し、此度同人と計つて雑誌を創刊したいから是非賛同してくれとのことであつた。

蓋し当時我大学には米国のモールス氏が在つて盛んに進化論を流行らせて居た為め、一は其感化を受けて、此計画もなされたのであらう。私は無論之に賛成し、箱根より帰るや否や、早速其話を進めて、実行に取り掛つた。同人は主に文科出の人達で、千頭清臣、福富孝季、井上哲次郎、磯野徳三郎の諸君であつた。

今日雑誌を起すことは左程困難でもないが、当時はそれが容易の業ではなかつた。幸、其時分の大学教授井上良一君の弟に井上蘇一といふ人があり、本屋を営んで居たので、それに販売其他の世話をして貰ひ、又同じく本屋の石塚徳次郎君とも相談して、愈々明治十四年十月、東洋学芸雑誌の名に於て其初号を発行する運びになつた。

内容は科学に関するものを主に蒐め、たゞそれだけでは無味乾燥する虞れありとし、文芸其他の記事をも加ふる事にした。（中略）

其後、大学教授の人々も同人として大に声援してくれるやうになり、外山正一、菊池大麓、矢田部良吉の諸君は其主なるもので、外山君が例の新体詩を作つて載せたのも此雑誌であつた。[7)]

つまり、杉浦はイギリスに留学した時に愛読した科学雑誌 *Nature* のような雑誌を、日本でも発刊したいと願ったのである。そしてそれから生まれた『東洋学芸雑誌』はモースの進化論の講義に衝撃を受けた東京大学の教授と卒業生を中心に創刊されたと述べられている。ここで杉浦は *Nature* の名前しか取り上げていないが、同誌の第４号で掲載された上田秀成の記事からは *Contemporary Review* と *The Popular Science Monthly* も意識されたと窺える。

「コヽヲ以テ本誌第四号即チ本月本日ノ発行ヨリ紙数ヲ増シ論説ヲ精査シ且周ク内外ノ学士ニ玉章ヲ寄セラソ了ヲ乞ヒ其許諾ヲ得タレバ益々本誌ノ光栄ヲ加ヘ弥々読者ノ望ニ添ユルヲ得ン然リ卜雖モ吾輩ハ敢テ之ヲ以、足リトス

ルモノニ非ス今日以還勉メテ止マス遂ニハ英ノコンテンポラリー・レビュー或ハ米ノポピュラル・サイヤス・モンスリーノ如キ一大雑誌タラシメンヿヲ期ス」[8)]

南方が読んでいた三つの総合科学雑誌、イギリスの *Nature*、米の *The Popular Science Monthly* と日本の『東洋学芸雑誌』がここで繋がっている点は非常に興味深い。

『東洋学芸雑誌』は啓蒙主義、進化主義と西洋崇拝の面が強かった。西洋での最新の科学の発展と応用を紹介した者もいたが、漢字を廃してローマ字を用いるべきであると論じた者もいた。ここで一例として最も影響力があった投稿者の一人、東京大学の総長であった加藤弘之（1836 ～ 1916）の論説を取り上げる。

上記の回想で杉浦は、日本で初めて進化論を紹介したモース（Edward Sylvester Morse, 1838～1925）とその影響について触れている。しかし、近代生物学はまだ成立していなかった日本ではモースの説明は理解しにくく、一般の人にそれほど影響を及ぼさなかったと思われる。日本で進化論、とりわけ社会進化論を流行らせたのは加藤であった。彼は長年、すべての人間は生まれながら平等かつ自由であると主張してきた。自由民権論者のよき味方であった。しかし、1882年に『人権新説』を表し、それまでの主張は誤りであったとした。すなわち、天賦人権論は「妄想主義」にすぎないと述べたのである。なぜなら、実際に権利を持つのは優れた才能と財産を持つ人達であるからである。そして、自分がこれまで間違っていたことはダーヴィン、スペンサーなどの進化論者の論を読んだ時に気がついたと述べた[9)]。加藤の軌道修正は激しい非難を浴びる一方で、彼が進化論から導いた「優勝劣敗」の論は瞬く間に日本に広まった。これ以降、加藤の名は進化論と結びついた。

加藤は『東洋学芸雑誌』においても、同様の傾向を見せている。本誌の創刊号は彼の「人為淘汰ニヨリテ人才ヲ得ルノ術ヲ論ス」[10)] から始まっている。そこで加藤は自然淘汰と人為淘汰の違いを説明した後、日本人の人為淘汰は行われるべきかどうかを読者に問いかけた。すなわち、強い小児だけが育つべきどうか、と医学をもって病気の人を治すべきかどうかの二つの問であった。これに対する様々の回答が来て何年間もこの議論が続いていた。この論争の最後の記事は丁度

南方が1886の1月に購入した第40号に掲載された。

これが終わると、加藤は次に「人種改良ノ弁」[11]を発表した。これは高橋義雄が『日本人種改良論』で提案したことについて検討したものである。すなわち、日本人は欧米人と結婚して新しい日本人種を作るべきかどうかという問題を扱っていた。

教育者の加藤にとって人為淘汰は大きな問題であったことは当然である。『人権新説』で「優勝劣敗」の法則を認めた以上、今度はどうやって西洋人に対抗できる優秀な日本人を育てるのかという問題が出てきたからである。この議論の根底には明らかに進化論と西洋人に対するコンプレックスが潜んでいた。

東京大学の総長であった加藤の論説はこの雑誌の売りの一つであったと思われる。東京大学を目指していた南方はモースの『動物進化論』と加藤の『人権新説』を購入し[12]、『東洋学芸雑誌』での加藤の論説と雑誌の雰囲気に少なからず影響されたと思われる。

ここでもう一つ東京大学と関連していた雑誌に少しばかり触れたい。実は、南方は『東洋学芸雑誌』と深い関係を持ったRōmaji Kaiにも入会したのである。この会はその名の通り、漢字の完全な廃棄を求めていた。その会誌、*Rōmaji Zasshi*の何冊かを南方は持っていたことはその日記から分かる。更に、南方熊楠記念館で保管されている南方の手書きノートである『課余随筆』には創刊号から写した次の興味深い抜書が見られる。

「七人の教育家　イギリス国にて当時教育家の七傑ともいうべきものは、次のごとくなるよし、1 Spencer, 2 Huxley,

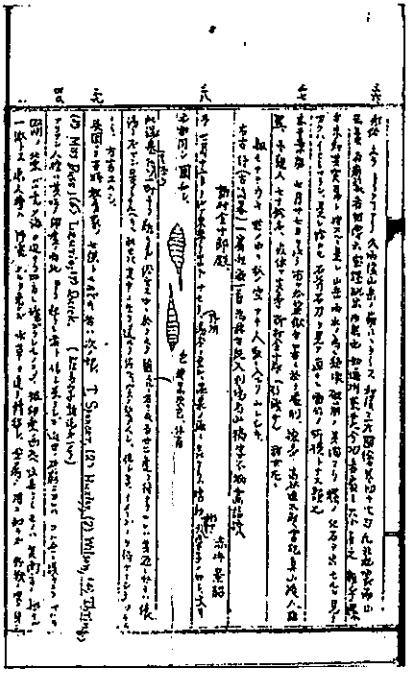


図1　『課余随筆』に見える*Rōmaji Zasshi*からの抜粋

3 Wilson, 4 Thring, 5 Miss Buss, 6 Laurie, 7 Quick」

これは南方の自筆資料の中で、スペンサーの名前が出て来る最も古いものである。南方はこれを *Rōmaji Zasshi* から写したと明記している。

実は、このリストは *Rōmaji Zasshi* の意見を反映したものではなく、*The Popular Science Monthly* の *A Test of Philosophy*[13] という記事に基づいているものである。これも、上述したように、東京大学関連の諸雑誌にとっては *The Popular Science Monthly* はどれほど重要な情報源であったのか、一つの良い例である。さらに、当時の日本とアメリカではスペンサーはどれほどもてはやされたかを物語っている。なぜなら、*A Test of Philosophy* は、「世界一の哲学者」であるスペンサーは近頃イギリスで「世界一教育者」としても選ばれたということを述べているスペンサー崇拝の記事であるからである。

では、もう少し詳しく *Rōmaji Zasshi* の創刊号の内容を見てみよう。

"Shogen" の後では "Ronsetsu" のコーナーで、Nani wo ka Gakumon to iu?—Katō Hiroyuki, Rōmaji no Benri—Shimada Samurō, Taiyōreki no Benri—Terao Hisashi, Nippon Kaika no Seishitsu—Taguchi Ukichi の四つの記事が載せられている。それに "Zappō"、"Kodomo no Tame"、"Rōmaji kai kiji" のコーナーが続いている。

興味深いことに、"Zappō" では初めて *Nature* に発表することができた日本人の紹介やスペンサーの宗教進化論をまとめた本の出版情報などが載せられている。南方の後年の思想活動と結びつくものばかりである。

いずれにせよ、南方は東京大学をとりあえず目指していたのであるから当然ではあるが、予備門時代はまるで加藤と東京大学の魔法にかけられたと思われるほど東京大学関連の事物に関心を示しているように見える。特に西洋の文明に関連する情報についてこのことが言える。すなわち、南方は『東洋学芸雑誌』その他の東京大学関連雑誌から啓蒙主義、進化論主義と西洋崇拝の洗礼を受けたのである。

The Popular Science Monthly[14]

南方はアメリカへ渡ると、今度『東洋学芸雑誌』に代わり、*The Popular Science Monthly* を購入し始めた。

現存している南方の雑誌のコレクションの中で、南方熊楠顕彰館ではその第

31巻1号と3号（1887年5月と7月の分）、第33巻6号（1888年10月の分）、第34巻3号（1889年1月の分）、第36巻3号と5号（1990年1月と4月の分）の六冊しか保管されていない。これだけを見ると、南方はそれほど本誌に興味を示さなかったと思われるかもしれないが、実は、南方が本誌をよく購入したことは彼の日記で確認できる。

以下で日記に見える *The Popular Science Monthly* に関する記述を抜粋する。

1887年：

1月22日　ロビンソンクルーソー七十五銭、ポピュラル・サイエンス・モンスリー五十銭、ノウトブック十銭、レッターペイパー五十銭。（107頁）

1月29日　ポピュラル・サイエンス・モンスリー第三十巻二号をかふ。（108頁）

2月　5日　夜ポピュラル・サイエンス・モンスリー当月分一冊買、又ハーパース・ライブラリー・シリーズの内、罪の歴史、ガリバルヂ伝、笠頓自伝、Cleveden 各一冊買ふ。（109頁）

3月　3日　ポピュラル・サイエンス・モンスリー二月分常楠へ送る。（112頁）

3月　4日　The Popular Science Monthly of inst. を購ふ。（112頁）

3月15日　常楠へPopular Science Monthly of instant Edithionをおくる。（113頁）

3月30日　ポピュラル・サイエンス・モンスリー四月分一冊購収。（115頁）

3月31日　弟へ又ハガキ一つ、ポピュラル・サイエンス・モンスリー四月分一冊を贈り、竹川寅次郎氏へハガキ一つ、津田安麿氏へハガキ一つ出す。（115頁）

5月11日　兄へハ一、吉田氷次郎へ状一、志村へハガキ一、弟へハ一、野尻へ状一、弟へポピュラル・サイエンス・モンスリー一、差出す。（119頁）

6月14日　Sent the Popular Science Monthly, newest edition, to the Brother in Tokio.（122頁）

12月14日　Bought Populer Science Monthly XXXII for 50 ¢.（137頁）

1888年：

1月　5日　ポピュラル・サイエンス・モンスリー当月分を購ふ。（143頁）

1月24日　Popular Science Monthly 昨年分三冊、Humboldt's Library 四冊、ハーパース地理書一冊、ジョンストン米国史一冊を購ふ。（145頁）

4月28日　ポピュラル・サイエンス・モンスリー三月の分をかふ。（154頁）

5月11日　発信　弟ポピュラル・サイエンス・モンスリー昨年九、十、二ヶ月分合二冊（156頁）

5月16日　発信　南方常楠ポピュラル・サイエンス・モンスリー四冊　昨年十一、十二、二ヶ月分、今年一、二、二月分（156頁）

6月　7日　ポピュラル・サイエンス・モンスリー四月分買ふ。（159頁）

8月　4日　発信　＜本月六日出す＞南方常楠（ハムボルドライブラリー五冊、ポピュラル・サイエンス・モンスリー当三、四二ヶ月分）（165頁）

8月11日　Sent Popular Science Monthly 2 to Tsunegusu.（166頁）

12月17日　Forwarded Oct. & Dec. numbers of the Popular Science Monthly to Tsunegusu.（178頁）

1889年：

2月　6日　マクミラン会社より所購ブレイク著アストロノミカル・ミッス及アレン著花色論、アップルトン会社よりポピュラル・サイエンス・モンスリー正月分着す。（192頁）

2月22日　今日ポピュラル・サイエンス・モンスリー昨十一月分と今正月分を常楠へおくる。（194頁）

2月27日　ポピュラル・サイエンス・モンスリー三月の分を購ふ。（195頁）

3月　2日　午後図書館へ行き、ポピュラル・サイエンス・モンスリーを読む。来信　アップルトン会社ポピュラル・サイエンス・モンスリー当二月分（195頁）

3月　4日　弟へポピュラル・サイエンス・モンスリー当二月三月の分二冊送る。（195頁）

4月　8日　ポピュラル・サイエンス・モンスリー今月分着。（200頁）

4月12日　発信　常楠ポピュラル・サイエンス・モンスリー当月分一冊（201頁）

12月10日　朝六時起。朝郵便局に赴く。本日及明日二便を以て、上貼布せる

目録通りの書物を求ん為それぞれ送金す。（中略）

Appleton & Co.—Popular Science Monthly 1 yr.—5.00（231～232頁）

以上の記述を表でまとめて見ると、以下のようになる。

巻数号数	何年何月の分	購入日	常楠へ送った日
第30巻1号	1886年11月		
第30巻2号	1886年12月	1887年1月29日	
第30巻3号	1887年1月		
第30巻4号	1887年2月	1887年2月5日	1887年3月3日
第30巻5号	1887年3月		
第30巻6号	1887年4月	1887年3月30日	1887年3月31日
第31巻1号	1887年5月		
第31巻2号	1887年6月		1887年6月14日
第31巻3号	1887年7月		
第31巻4号	1887年8月		
第31巻5号	1887年9月		1888年5月11日
第31巻6号	1887年10月		1888年5月11日
第32巻1号	1887年11月		1888年5月16日
第32巻2号	1887年12月		1888年5月16日
第32巻3号	1888年1月	1888年1月5日	1888年5月16日
第32巻4号	1888年2月		1888年5月16日
第32巻5号	1888年3月	1888年4月28日	1888年8月4日
第32巻6号	1888年4月	1888年6月7日	1888年8月4日
第33巻1号	1888年5月		
第33巻2号	1888年6月		
第33巻3号	1888年7月		
第33巻4号	1888年8月		
第33巻5号	1888年9月		
第33巻6号	1888年10月		1888年12月17日
第34巻1号	1888年11月		1889年2月22日
第34巻2号	1888年12月		1888年12月17日
第34巻3号	1889年1月	1889年2月6日	1889年2月22日
第34巻4号	1889年2月	1889年3月2日	1889年3月4日
第34巻5号	1889年3月	1889年2月27日	1889年3月4日
第34巻6号	1889年4月	1889年4月8日	1889年4月12日

南方が確実に所有していたものを灰色で塗りつぶした。

何号か明記されていないものもある。それを含めると、1887年に11か月分、

1888年は8か月分、1889年は4か月分と1990年の12か月分について日記に言及されている。つまり、南方は第35巻はともかく、第30巻から第37巻まではほとんど全部購入し、目を通したと思われる。すなわち、南方は本誌に対して並みならぬ関心を示していたのである。

では、*The Popular Science Monthly* はどのような雑誌であったかを見てみよう。

1916年で、本誌の第88巻の冒頭で創刊者のヨーマンズと雑誌の歴史を紹介した記事が載っている。

> アイデア自体はヨーマンズのものではあったが、『ザ・ポピュラー・サイエンス・マンスリー』を事実上に生み出した功績はハーバート・スペンサーのものである。英人（訳者：スペンサー）の著作に対する米人（訳者：ヨーマンズ）が感じた感嘆から、二人の間に深い友情が芽生えた。
> ヨーマンズは一旦本誌の企画を中止したことをスペンサーに書き送ったところ、スペンサーが新発行物のために書くことを約束した一連の記事の最初を、ヨーマンズは受け取った。1872年の4月に記事がヨーマンズのところへ届くと、新雑誌の創刊号は翌月に出版された。（中略）
> ハーバート・スペンサーの記事は話題となり、雑誌は最初から大成功であった。ヨーマンズは彼の雑誌へ寄稿してくれる卓越した人々を集めることに成功した。スペンサーの記事のほかには、ジョン・ティンダル、トマス・ハクスリー、R.A.プロクター教授、ヘンリー・モーズリー博士、ヘンリー・ウォード・ビーチャーその他、深慮しながらも明瞭に記述する人達の記事があった。
> 一年半がたつと、発行部数は1万2千部を突破した。これは一部は50セント、一年分購読料が5ドルした雑誌としては一当時は一冊はかなり厚かったとはいえ一非常に高い発行部数であった。
> 『ザ・ポピュラー・サイエンス・マンスリー』はアメリカでは最も知られた発行物であった。なぜなら、我が国はもとより、ヨーロッパでも同じくらい広く知られたからである。（筆者訳）[15]

つまり、*The Popular Science Monthly* はスペンサーのおかげで、と同時にスペ

ンサーのために創刊された雑誌であった。そして他の投稿者のほとんどもやはりスペンサーの意見に近い見解を示していた。

しかし、南方が本誌を購入した時期、スペンサー本人は体調不良でほとんど投稿しなかったのである。とはいえ、彼の影響が薄くなったわけではない。ほとんどの論説は彼を基にしていた。スペンサーの影響についてフィスク（John Fiske, 1842～1901）は1890年に次のように述べている。

> 現代物理学の歴史を顧みると、力の相互関係説や光の波動説などの場合もそうであったように、根づく瞬間がやってくるまでは、賢明なアイデアはふわふわとした種のように大空中に浮かんでいた事例は多くある。現代思想の最も雄大な業績、すなわち進化説も例外ではなかった。あらゆる分野の学生と研究者、物理学も歴史学も同様、目の前の現象を観察すると、何か漸進するかつ整然とした変化や発展のぼやんとした仮説を立てる傾向が見られた。すなわち、世界はまさにスペンサーの偉大な著作を待っていた。だからこそこれほど早く古い考え方に勝利したのである。そしてその勝利はあまりにも完全で迅速であり、かつ決定的であったため、その全貌を正確に語るまでは後一世代は必要であろう。一方人々の心はその大模範かつ目まぐるしい変化にやや呆然とする傾向にある。そして、人々がスペンサー氏の考えを、それが氏の考えであることを認めることも、あるいは、どこからそれを入手したのかをも知ることもなく、採り入れるのを余りにもよく目にするのである。スペンサー氏がその見解を発表するや否や、それはあっちこっちの専門家によって採用され、それぞれの専門領域で用いられた。スペンサーのシステムは、すぐに理解され、同化された。それに、すでにスペンサーの見通しが明瞭に貫徹した難解な思考の領域で手探りするまじめな思想家たちによって、新しい解説がなされていたのである。したがって、進化の教説は、今日、この世代のあらゆる思想と不可分に混入することになったのである。私は何も人々は通常進化説について明瞭な考えを持っていると言っているのではない。というのは、明瞭な考えというのはそれほどありきたりことではないからである。ほとんどの人がニュート

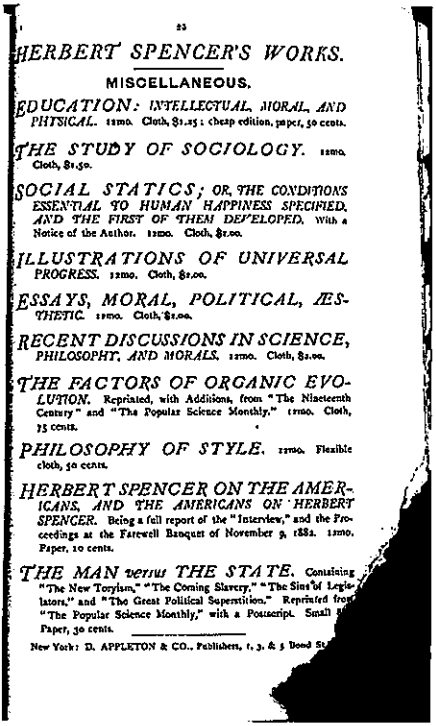
ンの万有引力の法則が何であるか尋ねられても、明瞭な説明はできないであろう。(筆者訳)。[16]

フィスクはスペンサーの友人で、応援者であったため、上記の記事では多少事実が誇張されている。しかし、スペンサーは少なくとも本誌の投稿者たちの論説の基盤となっていたことは間違いない。

また、本誌の広告欄を見ると、スペンサーの本の紹介が目立つ。それもそのはずである。なぜなら、雑誌の創刊者・編集者はスペンサーのアメリカでの編集者であるヨーマンズであったからである。更に、雑誌を出版した Appleton and Co. 社はスペンサーのアメリカでの唯一の正式な出版社であった。

南方はこの雑誌と *The Humboldt Library of Popular Science Literature* に掲載された数多くのスペンサーの著作を通じてますますスペンサーの世界に入り込んだのである。本誌を購入し始めた翌年に、南方はスペンサーのほぼ全著作を揃えていた。

どれほど南方が *The Popular Science Monthly* に本気に取り組んだかを彼の手書きノートが物語っている。すなわち、南方は図書館へ通いながら、バックナンバーの第28巻と第29巻から彼の注目を引いた記事を自筆ノートである *The Scientific Memoirs*、『南方熊楠叢説第一』などへ写した。内容は様々であるが、南方は―予備門時代でもそうであったように―特に進化論・科学


23

HERBERT SPENCER'S WORKS.

MISCELLANEOUS.

EDUCATION: INTELLECTUAL, MORAL, AND PHYSICAL. 12mo. Cloth, $1.25; cheap edition, paper, 50 cents.

THE STUDY OF SOCIOLOGY. 12mo. Cloth, $1.50.

SOCIAL STATICS; OR, THE CONDITIONS ESSENTIAL TO HUMAN HAPPINESS SPECIFIED, AND THE FIRST OF THEM DEVELOPED. With a Notice of the Author. 12mo. Cloth, $2.00.

ILLUSTRATIONS OF UNIVERSAL PROGRESS. 12mo. Cloth, $2.00.

ESSAYS, MORAL, POLITICAL, ÆSTHETIC. 12mo. Cloth, $2.00.

RECENT DISCUSSIONS IN SCIENCE, PHILOSOPHY, AND MORALS. 12mo. Cloth, $2.00.

THE FACTORS OF ORGANIC EVOLUTION. Reprinted, with Additions, from "The Nineteenth Century" and "The Popular Science Monthly." 12mo. Cloth, 75 cents.

PHILOSOPHY OF STYLE. 12mo. Flexible cloth, 50 cents.

HERBERT SPENCER ON THE AMERICANS, AND THE AMERICANS ON HERBERT SPENCER. Being a full report of the "Interview," and the Proceedings at the Farewell Banquet of November 9, 1882. 12mo. Paper, 10 cents.

THE MAN *versus* THE STATE. Containing "The New Torylsm," "The Coming Slavery," "The Sins of Legislators," and "The Great Political Superstition." Reprinted from "The Popular Science Monthly," with a Postscript. Small 12mo. Paper, 30 cents.

New York: D. APPLETON & CO., Publishers, 1, 3, & 5 Bond St.

図2　南方が所有していた *The Popular Science Monthly* に見える数あるスペンサーの広告の一つ

と宗教の対立の問題に強い関心を示していた。

ここで一つだけ興味深い記事を例として取り上げたい。

Thomas Henry Huxley. The Interpreters of Genesis and the Interpreters of Nature. In *The Popular Science Monthly* vol. 28, February, 1886.

この記事でハクスリは以前 *The Century* で掲載されたグラドストーン（William Ewart Gladstone, 1809 ～ 1898）の記事に反論した。グラドストーンは現今の科学者の見解はまさに『聖書』の「創世記」に書かれた順番と同じ順番での進化を主張していると論じた。つまり科学は『聖書』を裏付けたと言った。これに対してハクスリは最新の科学的見解はグラドストーンの解釈と全く違っていると説明した。更に、キリスト教の科学的な解釈は無意味であると論じた。すなわち、その二つの調和を計ることを試みる人達は既に「創世期」での「一日」の意味を文字通りの24時間の意味でとっていない、「創造」も実は「進化」の意味で理解している。ハクスリによると、「創世期」のテキストをそこまで自由に解釈してしまうと、順番などの文字通りの解釈だけにこだわる必要はもはやない、と鋭く批判した。

ハクスリによると、そもそもこのような議論は科学と宗教の対立ではなく、科学と神学の対立の問題を扱っていると述べた。なぜなら、科学はそもそも人間の知識外のものを一切取り扱っていないからである。しかし、やはりエッセーの最後にハクスリは宗教と科学の対立に関しては次のような見解を述べた。

> 科学が対立しているのは宗教ではなく、宗教自体をほとんど踏み潰した異教の名残と誤った哲学である。私は、二つの対立は永久になくならないと思っている。しかし、真の科学は永久にその最も有益な機能を果たし続けるであろう。すなわち、宗教の名のもとで人間に偽りの科学がかける負担から解放することである。（筆者訳）[17]

上記のハクスリの見解と南方が後に土宜法竜との書簡で述べた見解を比較してみよ。

「理窟に合わぬ（科学に合わぬ）ことをむりに頭に押しこむが仏教ならんには、小生はいかにも尽力してその仏教を絶滅せしめんことを欲す。何となれば、理窟と併行せぬ教理の一世界一社会に大害あるは、カソリック教の過去現在のことをみても証し得べし」[18)]

両者はかなり似ている点は非常に興味深い。これは、南方はこのような科学観と世界観を本誌から学んだ可能性を物語っている。

終わりに

以上、南方は東京とアメリカで読み続けた二つの雑誌、『東洋学芸雑誌』と *The Popular Science Monthly* を紹介した。この二つは非常に似ている。つまり二つともその成立過程では進化論が大きく関わったことである。それもそのはずである。なぜなら *The Popular Science Monthly* は進化論者の代表者であったスペンサーのために創られた雑誌であったからである。他方、『東洋学芸雑誌』はその *The Popular Science Monthly* や *Nature* を模範とした雑誌であった。しかも、その最も有力な投稿者は日本で社会進化論に火をつけた加藤弘之であった。

南方は『東洋学芸雑誌』で科学と思想の最新の話題を学び、アメリカへ渡り、本場の総合科学雑誌を読むようになった。南方がアメリカで数ある雑誌の中から *The Popular Science Monthly* を選んだのは偶然ではなかった。南方は予備門で進化論の洗礼を受け、それに基づいた世界観を身につけたのである。

筆者は現在、スペンサーが南方の世界観に及ぼした影響について研究を行っている。ここで紹介した二つの雑誌がその調査の過程において中重要な手掛かりなることは確実である。

註

1)　飯倉照平・長谷川興蔵編『南方熊楠　土宜法竜　往復書簡』八坂書房、1990年、34頁。

2)　岩村忍・入矢義高・岡本清造監修、飯倉照平校訂『南方熊楠全集』第1巻、平凡社、1971年、平凡社、i頁。

3) 前掲書、『南方熊楠全集』第7巻、8頁。

4) 『中央学術雑誌』は1885年の3月に発刊された予備門の機関誌である。同月の『東洋学芸雑誌』に載せられた報告によると、次のような目的で発刊されたようである。「本誌は東京専門学校講師学生及び校外諸名家を以て組織せる同攻会に於て会員諸氏の講究せる法理文三学に係はる論説翻訳記事雑録を掲載する者にして議論の高尚なるを引証の的切なるとは世上多く其比を見ざる所なり今般第一号より続々発兌せんとす」（『東洋学芸雑誌』第42号、広告欄）
南方熊楠顕彰館で本人が購入したと思われる1–28号（1885–1886）が保管されている。これのほとんどに関しては南方の日記には明記されている。本誌は経済学から宗教まで様々なテーマを取り上げた。特筆すべき方向性はなかったようである。本誌は基本的に予備門の生徒を対象としたものであったと思われる。『中央学術雑誌』は予備門の校長が創刊した『東洋学芸雑誌』と密着な関係をもちながらも、それに対し、加藤弘之などのような著名な論者は掲載されなかった。現存する南方が所有していた『中央学術雑誌』では、宗教に関する二つの記事、高田早苗著「耶蘇教東漸ノ利益ヲ説テ仏徒に望ム所アリ」（第15号）と西洋天狗著「宗教論」（第11号）に書き込みが見られる。これは彼の関心を窺える高位な資料ではあるが、その詳細な分析に関しては別の機会で論じる。

5) 1877年～1885年の間に発行された東京大学の総合機関誌であった。南方は最後の1年分しか読まなかったと思われる。本誌に関しては、後年はともかく、初期は *The Popular Science Monthly* の翻訳は非常に多かったことは注目に値する。

6) 長谷川興蔵『南方熊楠日記』第1巻、八坂書房、1987年。

7) 杉浦重剛「東洋学芸雑誌の改題に際して」『学芸』（東洋学芸雑誌）第487号、2–3頁。杉浦重剛については、Nicholas Casson『杉浦重剛の留学体験とその後の思想展開』大阪外国語大学、日本語日本文化特別コース、博士論文、2005年を参照。

8) 上田秀成「本誌改良ノ因由ヲ述ベテ皇帝陛下ノ万歳ヲ祝シ奉ル」『東洋学芸雑誌』第4号、47頁。

9) 加藤弘之『人権新説』丸屋善七、1882年。

10) 『東洋学芸雑誌』1号（1881年10月）、2号（1881年11月）。

11) 『東洋学芸雑誌』53号（1886年2月）、54号（1886年3月）、55号（1886年4月）。

12) 原田健一「明治十九年東京南方熊楠蔵書目録」『熊楠研究』第3号、南方熊楠資料研究会、2001年。

13) A Test of Philosophy. In *The Popular Science Monthly*, June, 1885, p. 121.

14) 執筆者は南方熊楠と *The Popular Science Monthly* の関係については3年前から独自に研究をすすめてきたが、昨年は同じテーマに触れた武上真理子の『科学の人・

孫文：思想史的考察』勁草書房、2014年が出版された。さらに、2014年8月7日に行われたシンポジウム、「南方熊楠と真言密教」に橋爪博幸は『南方熊楠と《ポピュラー・サイエンス・マンスリー》』というタイトルで口頭発表を行った。そのため、両者が中心に扱っていた南方の自筆ノートの解説はここで省略する。

15) "*While the idea was Youmans', Herbert Spencer deserves the credit for bringing The Popular Science Monthly into actual being. A warm friendship had sprung up between the two, based upon the American's admiration for the Englishman's work.*

Youmans had written to Spencer that he had temporarily abandoned the plan of starting the magazine when he received the first of a series of articles which Spencer had promised to write for the new publication. The articles reached Youmans in April, 1872, and the first issue of the new magazine appeared the following month ...

The Herbert Spencer articles made a sensation and the magazine was a success from the start.

Youmans was able to get great men to write for his magazine. In addition to Spencer's there were articles by John Tyndall, Thomas Huxley, Professor R. A. Proctor, Dr. Henry Maudsley, Henry Ward Beecher and others who thought profoundly and were able to write simply.

Within a year and a half the circulation was 12,000 and that would be a big circulation for a monthly that sold for fifty cents a copy and $5 a year, even in these days of large volume.

The Popular Science Monthly became the most famous publication in America because it was as widely known in Europe as it was in this country." (Vision of a Blind Man. In *The Popular Science Monthly*, vol. 88. p. vii.)

16) "*The history of modern physics—as in the case of the correlation of forces and the undulatory theory of light—furnishes us with many instances of wise thoughts floating like downy seeds in the atmosphere until the moment has come for them to take root. And so it has been with the greatest achievement of modern thinking—the doctrine of evolution. Students and investigators in all departments, alike in the physical and in the historical sciences, were fairly driven by the nature of the phenomena before them into some hypothesis, more or less vague, of gradual and orderly change or development. The world was ready and waiting for Herbert Spencer's mighty work when it came, and it was for that reason that it was so quickly triumphant over the old order of thought. The victory has been so thorough, swift, and decisive that it will take another generation to narrate the story of it so as to do it full justice. Meanwhile, people's minds are apt to be somewhat dazed with the rapidity and wholesale character of the change; and nothing is more common than to see them*

adopting Mr. Spencer's ideas without recognizing them as his or knowing whence they got them. As fast as Mr. Spencer could set forth his generalizations they were taken hold of here and there by special workers, each in his own department, and utilized therein. His general system was at once seized, assimilated, and set forth with new illustrations by serious thinkers who were already groping in the regions of abstruse thought which the master's vision pierced so clearly. And thus the doctrine of evolution has come to be inseparably interfused with the whole mass of thinking in our day and generation. I do not mean to imply that people commonly entertain very clear ideas about it, for clear ideas are not altogether common. I suspect that a good many people would hesitate if asked to state exactly what Newton's law of gravitation is." (John Fiske. Edward Livingston Youmans: The Man and His Work. In *The Popular Science Monthly*, May, 1890, pp. 1~2.)

17) "*The antagonism of science is not to religion, but to the heathen survivals and the bad philosophy under which religion herself is often well-nigh crushed. And, for my part, I trust that this antagonism will never cease; but that, to the end of time, true Science will continue to fulfill one of her most beneficent functions, that of relieving men from the burden of false science which is impose upon them in the name of religion.*" (Thomas Henry Huxley. The Interpreters of Genesis and Nature. In *The Popular Science Monthly*, vol. 27, February, 1886, p. 460.)

18) 前掲書、『南方熊楠　土宜法竜　往復書簡』131頁。

〈キーワード〉南方熊楠、進化論、*The Popular Science Monthly*、東洋学芸雑誌

About the Effects of Tōyō Gakugei Zasshi and The Popular Science Monthly on the Views of Kumagusu Minakata

Peter SZALAY

In this research note I discuss two scientific magazines, which Kumagusu Minakata (1867–1941) has been avidly reading between 1884 and 1890. One is *The Popular Science Monthly*, which is famed as the magazine that brought the Americans attention to Herbert Spencer (1820–1903), the other is *Tōyō Gakugei Zasshi*, which was mostly written by the teachers and alumni of Tokyo University and which itself have been greatly influenced by *The Popular Science Monthly*. Minakata as a student originally aiming for Tokyo University, started reading *Tōyō Gakugei Zasshi* in 1884 and then in 1887 switched to *The Popular Science Monthly*. These magazines shared very similar ideals as both had high estimates of the works of Herbert Spencer and the theory of evolution in general, while at the same time both heavily criticized 'outdated' religious sentiments. This is something that can also be seen in Minakata's writings of later years and which he undoubtedly first picked-up from these magazines.